講座全体の見取り図（カッコ内は開講予定日）

中東の四季とさまざまな暦（2022 年 9 月 14 日）

中東の人々の衣服（2022 年 10 月 12 日）
中東の食文化
　アラブ料理/ユダヤ教徒の料理（2023 年 1 月 11 日）
　トルコ料理（2023 年 2 月 8 日）
　イラン料理（2023 年 5 月 10 日）
中東の人々の住まい（2022 年 11 月 9 日）
中東の人々の娯楽（2023 年 6 月 14 日）

中東の年中行事
　イスラームの巡礼と犠牲祭（2022 年 7 月 13 日）
　イスラームの断食月（ラマダーン）（2023 年 4 月 12 日）
　イスラーム・シーア派の「アーシューラー」（2022 年 8 月 10 日）
　キリスト教徒のクリスマス/ペルシア文化圏の冬至（2022 年 12 月 14 日）
　ペルシア文化圏の新年（ノウルーズ）（2023 年 3 月 8 日）

写真上は、イラン最高峰ダマヴァンド山。標高 5609m。独立峰で富士山に似た外観
下は、ダマヴァンド山麓で咲き誇るハカマオニゲシ（*Papaver bracteatum*）

キリスト教徒のクリスマス/ペルシア文化圏の冬至

写真　　ベツレヘムの街と聖誕教会　19 世紀後半撮影

キリスト教を開いたイエスは、パレスティナのベツレヘムで生まれた。新約聖書によると、イエスは誕生後、飼い葉桶に寝かされた。西暦 329 年、コンスタンティノス大帝は、イエス誕生の伝承がある場所に、最初の教会堂の建設を始めた。この教会は焼失したが、東ローマ帝国のユスティニアノス帝が 6 世紀に再建した建物は、現存している

1　中東のキリスト教

○日本では、「キリスト教」は欧米起源の宗教との理解が一般的です。桃山時代のキリスト教伝来は欧州から、また明治以降日本にもたらされたキリスト教は、欧米やロシアから布教されたものであり、そのような印象は無理もないことです

○しかし、キリスト教揺籃の地であるパレスティナはもちろんのこと、キリスト教を受容し、教義・制度の確立に決定的な役割を果たした東ローマ帝国は、「中東」と呼ばれることになる地域に位置しています

○新約聖書や、初期キリスト教の歴史に親しんだ人でも、中東地域のキリスト教徒は、イスラームの拡大により消滅したと思い込んでいるかも知れません

○実際には、キリスト教の生誕から現代まで、途切れることなく存続してきたキリスト教徒の共同体は、中東各地にあります。キリスト教の宗派の観点からは、中東地域を中心に分布する各教会は、「東方諸教会」と総称されます

写真　　聖誕教会（6 世紀再建）の内部

パレスティナの聖地は、451 年のカルケドン公会議により、正教会エルサレム総主教の管轄とされている。その後、諸宗派が分かれ、聖地の管理権は宗派の争いに巻き込まれた。カトリック教会は、19 世紀にフランス、オーストリアの支援で聖地への進出を再開、1882 年には聖誕教会の古代の建物の横に、教会堂を建設した。毎年、クリスマスイブには、カトリックの教会堂における儀式が全世界に放映されている

２　初期キリスト教会の概観

〇イエスの直弟子や、これに準ずる人物は、「使徒」と呼ばれます。使徒の後継者となって、各地の信者を指導した宗教活動家は、「主教」と呼ばれるようになりました

〇初期のキリスト教は、弾圧を蒙りながらも、ローマ帝国の交通網に沿って拡大し、帝国の諸都市に拠点を作りました。各都市にキリスト教徒の共同体が成立し、それぞれの指導者が、「主教」の地位を相互に認めていました

〇このような沿革から、発足時の教会は多元的な性格を備えており、主教は拠点とする都市の大小にかかわらず、対等との建前が成立しました

〇西暦 4 世紀に、大きな環境の変化が生じます。ミラノ勅令（313 年）によるキリスト教の公認と、国教化（380 年）を経て、キリスト教ローマ帝国が出現しました。コンスタンティノス大帝は、異教の中心であるローマを棄てて帝国の重心を東方に移し、324 年、新首都コンスタンティノープルを建設、330 年遷都しました

〇キリスト教は、帝国による迫害を受ける時代から、帝国の保護を受ける時代に入りました。主教の管轄地域は、帝国の行政区画に沿って整備され、全主教が出席する公会議において、教義が明確化されることになります

写真　　イエスが生まれた場所を示す銀盤

聖誕教会では、大理石の床にイエスが生まれた位置を示す銀盤が嵌め込まれていた。これは 18 世紀にカトリック信徒が寄進した品で、銀盤にはラテン語の銘文が刻まれていた。1847 年、銀盤は突然紛失した。正教会とカトリック教会の争論は、直ちに列強間の外交問題に発展した。オスマン帝国スルターンは、新たな銀盤を下賜して事態収拾を図ったが、銀盤のラテン語銘文を嫌った正教会とロシアの怒りを招き、クリミア戦争につながった

３　七つの公会議と五頭体制

○ 325 年の第一ニケア公会議から、787 年の第二ニケア公会議までの七回の公会議による決定をキリスト教の正統教義と承認し、これに従う共同体は正教会と呼ばれます。それ以降の宗教会議は、いかに重要であっても、全主教出席の条件を満たしていないとされます。ローマ教皇は、11 世紀までこの考え方を採っていました

○制度面においては、451 年のカルケドン公会議において、ローマ、コンスタンティノープル、アレキサンドリア、アンティオキア、エルサレムの主教には特別の称号が認められ、ローマ主教は「教皇」、アレキサンドリア主教は「教皇および総主教」、他の三主教は「総主教」と呼ばれるようになりました。これを五頭体制といいます

○全キリスト教世界は、5 人の教皇／総主教が指導する、5 つの管轄区域に分けられ、他の主教は、事実上、教皇／総主教の影響下に入りました。なお東ローマ皇帝は、あくまで俗人であり、聖職者組織の外にありました

写真　　ダマスカスのルーム・カトリック教会　2010 年 12 月 24 日撮影

1622 年、ローマ教皇は「布教聖省」を設置、東方のキリスト教徒をカトリックに改宗しようとした。多くの場合、東方諸教会の内紛に乗じてその一派をローマ教皇に服属させ、庇護を与えた。カトリックの教義を受容する一方、東方の典礼や独自の教会組織の存在を許された教会を「帰一教会」と呼ぶ。帰一教会には、正教会アンティオキア総主教座などから独立したルーム・カトリック教会（メリキト教会）他がある

４　キリスト教諸宗派の分立とイスラームとの出会い

〇公会議では、各地域で発展したキリスト教の教義を、統一する議論が交わされました

〇ところが、出席した主教たちの間で激論が生じ、帝国の安定のため融和を図る東ローマ皇帝の努力にかかわらず、反主流派の主教たちは異端の烙印を押されてしまいます

〇こうして、アリウス派、次いでネストリオス派が弾劾されました。さらに、キリストは神人両性を有するとのカルケドン公会議の決定を拒絶した主教たちは、後に単性論派と呼ばれる諸教会を形成して、正教会から離れました

〇 7 世紀には、アラビア半島からイスラーム帝国が急速に拡大し、東ローマ帝国からシリア・エジプトを奪います。イスラームには、ユダヤ教徒やキリスト教徒を「啓典の民」と認め、貢納などの義務と引き替えに、信仰の保持を許す制度がありました

〇キリスト教世界では、フランク王国と結びついたローマ教皇と、コンスタンティノープル総主教らの間で亀裂が広がり、11 世紀に東西教会の対立が顕在化します。ローマ教皇は、十字軍を組織して東方世界への干渉に着手しました

写真　　イラン・イスファハンのアルメニア教会　2015 年 12 月 30 日撮影

サファヴィー朝のアッバース 1 世は、1598 年イスファハンに遷都、アルメニア人を招き、イギリス、フランス、オランダなどとの外国貿易に従事させた。イスファハンは商業・手工業の中心となって殷賑を極め、「世界の半分」と呼ばれた。イランでは、王朝の交代やイスラーム革命が発生したが、キリスト教徒は一貫して保護を受け、信仰を守っている

５　キリスト教徒のクリスマス

○新約聖書には、イエスがヘロデ王の時代に生まれたと書かれていますが、誕生日の記述はありません

○エルサレム出身のアフリカノスは、西暦 221 年に至るキリスト教の歴史を編集した『年代誌』において、イエスの誕生日を 12 月 25 日と初めて特定しました

○この日付には、古代オリエントやローマ帝国で既に祝われていた冬至をキリスト教の行事に取り込んだ、あるいは、やはり太陽信仰にからめて祝われていた春分をマリア懐妊の日と考え、その 9 か月後を誕生日としたなどの解釈があります

○クリスマスツリーやキャンドルの使用は、17 世紀以後、欧州で始まった風習です。現在のクリスマスの祝い方のほとんどは、19 世紀以降に欧米で発案されました

○「サンタクロース」は、4 世紀の聖ニコラスに起源を持つとされます。聖ニコラスの伝承を、オランダ人が北米大陸のニューアムステルダム（現在のニューヨーク）に持ち込み、アメリカで「サンタクロース」の名により普及したとされています

○中東各地では、西洋風のクリスマスが広まり、非キリスト教徒も祝うようになります

写真　　冬至祭りの特別料理を準備するテヘランのレストラン

古代よりイランでは、冬至に太陽の復活を祝う習慣があった。冬至には、各家庭に親族が集まり、コルスィー（こたつ）に飾られた果物やナッツなどを食べながら、一年で一番長い夜を過ごした。レストランは、外食で冬至を祝う人々のため、特別料理を提供している

6　古代ペルシアの太陽信仰

○古代の印欧諸民族は、太陽神を信仰していたと考えられており、古代ペルシアの多神教においても、太陽神ミトラが主神として崇められました

○ゾロアスターは、ペルシアの多神教を改革し、善や光明、叡知を体現するアフラ・マズダーへの信仰を提唱しました。アフラ・マズダー信仰には、太陽神崇拝の要素が引き継がれます

○アケメネス朝ペルシア帝国は、ゾロアスター教を公式宗教としました。太陽神信仰に起源を持つ、冬至や春分の祭りが宗教行事となり、太陽の復活が祝われました

○アケメネス朝では、太陰太陽暦であるバビロニア暦が用いられていました。紀元前 525 年、アケメネス朝によるエジプト征服を契機に、エジプトで発達した太陽暦がペルシアにもたらされました

○ 3 世紀に興ったササン朝ペルシア帝国でも、ゾロアスター教が信仰されました。しかし、ササン朝はイスラーム帝国に滅ぼされ、イスラームがペルシアに浸透します

○ペルシア民族はイスラームを受容する一方、古代に遡る太陽信仰を、民間習俗として伝えました。今でもイランでは、太陰暦であるイスラーム暦（ヒジュラ暦）と併行して、春分を一年の始まりとするイラン暦（ヒジュラ太陽暦）が用いられています。

○冬至や春分は、宗教的意義を失いましたが、イランの人々により祝われています

写真　　冬至祭りの主役ザクロ

冬至祭りでは、太陽の再生を祝う意味から、太陽を象る丸く赤い果物が珍重され、ザクロ、スイカ、リンゴ、オレンジ、柿などが食卓に飾られる。夏から秋に収穫されるザクロやスイカは、冬至まで保存される。特にザクロは、古代ペルシア時代より、多数の種が繁栄を象徴することから神聖視され、冬至飾りの主役を務めている

7　ペルシア文化圏の冬至

〇冬至は、イランやアフガニスタン、タジキスタン、アゼルバイジャンなど、ペルシア文化の伝統を共有する国々で祝われています

〇一年で一番長くなる夜は、ペルシア語で「シャベ・ヤルダー」または「シャベ・チェッレ」と呼ばれます。「シャブ」は夜のこと、「ヤルダー」はシリア語起源で、「誕生」を意味します。ローマ帝国の迫害を逃れ、ペルシア帝国に移住したキリスト教徒が、冬至祭りをイエス生誕と結びつけたなごりとも解されています。「チェッレ」は、数字の 40 が起源で、冬の 40 日の始まりを意味するといわれます

〇冬至の夜には、食卓やこたつを、太陽を象った果物などの縁起物や花、キャンドルで飾ります。そして、家族で夕食を摂った後、果物やナッツをつまみながら、深夜まで談笑して時を過ごします。伝統的な余興には、14 世紀ペルシアの詩人ハーフェズの詩集を無作為に開き、そのページの詩の解釈を考える「ハーフェズ占い」があります

〇冬至の長い夜は、太陽に象徴される真理と、暗闇に象徴される邪悪の格闘と考えられました。太陽が暗闇をはねのけると、人々は真理の勝利を喜び、希望に満たされます